

ダニエル書 - 第九十番

日常を解き明かす：論争と矛盾の歴史的検証

Jeff Pippenger

2024-02-23

前回の記事の最後の一節を注意深くご覧になっていれば、Early Writings という書物に収められているその一節の原典をご覧になっているはずで、A. G. Daniells は、1910年に Sister White と「the daily」を主題として行ったインタビューの際に、その本を携えていたと主張しています。「the daily」がキリストの聖所での奉仕を表すという「嘘」を打ち立てようとしていた人々は、審判の時の叫びを上げた人々に与えられていた正しい見解に対する、Sister White の直接的で明確な支持を切り崩す必要がありました。彼らが作り上げた「嘘」とは、Sister White が具体的に述べていた唯一の警告は、時の設定に関するものだけだ、というものでした。それこそが、Arthur White が著した伝記で確立しようとしている主張であり、また、彼の父、すなわち Ellen White の息子と Daniells が、でっち上げたインタビューによって証明しようとしていたことでもあります。

すでに述べたように、「the daily」を主題とするホワイト姉妹とダニエルズの間での面談の記録は一切存在しない。そのいわゆる面談が持ち出されたのは1931年である。もしホワイト姉妹が1910年の面談で、ダニエルズの「the daily」に関する墮落した見解を支持していたのなら、ホワイト姉妹が自分の見解の推進に熱心だと指摘した人物である彼が、なぜその支持について二十一年間沈黙を守ったのだろうか。あれは面談ではなく、作り話だったのだ。

インタビューの捏造は、「the daily」に関する彼女の発言の文脈を、時の設定に対する彼女の警告に付随するものにすぎないかのように位置づけようとした。そしてアーサー・ホワイトは、1931年の歴史記述における提示のしかたによって、その嘘に自らの指紋を残した。キリスト者として彼は、単に歴史を報告し、歴史修正主義を持ち込むべきではなかった。私たちは前回の記事を、『Early Writings』の該当箇所の出典となっている1850年の一節で締めくくった。その記述は最初に1850年に『Review』に掲載され、その後『Experience and Views』という書物にも再掲された。三度目に現れるのは『Early Writings』の中であるが、『Early Writings』へと編纂される過程でいくつかの変更が生じた。しかし、彼女の働きを貶めようとして多くの『Spirit of Prophecy』の著作が改変されたと主張する人々がいるものの、私たちはそのようには言わない。

主は私に、1843年の図表は主の御手によって導かれ、そのいかなる部分も変更してはならず、数字も主が望まれたとおりでであることを示された。さらに、主の御手がある上であって、いくつかの数字にある誤りを覆い隠しておられたため、御手が取り去られるまでは、誰にもそれは見えなかった。

それから私は、『Daily』に関して、『sacrifice』という語は人間の知恵によって補われたものであり、本文に属するものではないこと、そして主はその正しい見解を「裁きの時の叫び」を上げた者たちにお与えになったことを見た。1844年以前、一致があった時には、ほとんどの者が『Daily』についての正しい見解で一致していたが、1844年以後は混乱の中で他の見解が受け入れられ、闇と混乱が後に続いた。Review and Herald、1850年11月1日。

この一節は、もともと1849年の「The Present Truth」という題の刊行物に掲載されたが、1850年11月に「Review and Herald」に印刷された。原稿では、シスター・ホワイトは、主が最近彼女に示された幾つかの事柄を書き記しているとはっきり述べており、記事全体を読むと多くの主題が扱われていることがわかる。彼女に示された主題はおよそ二十に及ぶ。要点は、元の記事では「the daily」という主題と「time setting」という主題が、彼女に示された事柄についての二つの別個の啓示だったということである。

元の原稿では、それらは別々の段落で示されていた。“Experience and Views”にその一節が再録された際、編集者は、ホワイト夫人が“the daily”に関する開拓者の見解を支持している段落を、時の設定に警告する次の段落と一つにまとめた。原文を読む際には、いくつかの主題が大文字化によって強調されていることに注意してほしい。彼女が“the daily”に関する開拓者の見解を支持している段落では Daily という語を大文字で書き、次の段落では Time という語を大文字で書いて、彼女に示された二つの主題の間に明確な区別を付けている。

親愛なる兄弟姉妹の皆様、

主が最近、幻のうちに私に示されたことを手短にお伝えしたいと思います。私は、イエスの麗しさと、天使たちが互いに抱く愛を示されました。天使は言いました-「彼らの愛が見えないのか。その愛に倣いなさい。」ちょうどそのように、神の民も互いに愛し合わなければなりません。非難は兄弟にではなく、むしろ自分自身に降りかからせなさい。私は、「持っているものを売って施しをしなさい」という勧告が、一部の人々によっては、その明るい光のもとに語られておらず、私たちの救い主の御言葉の真の目的が明確に示されていないのを見ました。私は、売る目的は、働くことができ自らを養える者に与えることではなく、真理を広めることであるのを見ました。働くことができる者を怠惰のうちに支え、甘やかすことは罪です。中には、あらゆる集會に熱心に参加してきた者がいますが、それは神の栄光のためではなく、「パンと魚」のためでした。そのような者は、むしろ家にいて自分の手で「良いこと」に励み、家族の必要を満たし、さらに現在の真理という尊い働きを支えるために捧げるものを持つほうがはるかによかったのです。

私は、一部の人々が、不信者の前で病人の癒しを祈ることに誤っていたのを見た。私たちのうちに病人がいて、ヤコブ5:14、15に従って教会の長老たちを呼び、彼らの上に祈ってもらうなら、私たちはイエスの模範に従うべきである。イエスは不信者を部屋の外に出し、それから病人を癒された。だから、私たちのうちの病人のために祈るときには、信仰のない人々の不信から離れるように努めるべきである。

それから私は、イエスが弟子たちだけを伴って二階の部屋に入り、まず彼らの足を洗い、次にご自身の裂かれた体を表すしるしとして裂かれたパンを食べさせ、また流された血を表すしるしとしてぶどうの実の汁を与えられた時へと指し示された。私は、皆が正しく理解して行動し、これらの事においてイエスの模範に従い、これらの礼典にあずかる際には、できるだけ不信者から離れているべきだと見た。

それから、イエスが聖所を去られた後に、最後の七つの災いが注がれることを示された。天使は言った——悪者の滅びや死をもたらすのは、神と小羊の怒りである。神の御声によって、聖徒たちは旗を掲げた軍勢のように力強く、恐るべきものとなる。しかしその時、彼らは書き記されたさばきを執行することはない。さばきの執行は、千年の終わりになされる。

聖徒たちが不死に変えられ、共に引き上げられ、豎琴や冠を受け、聖なる都に入った後、イエスと聖徒たちは裁きの座に就く。書が開かれ、命の書と死の書が開かれる。命の書には聖徒の善い行いが記され、死の書には悪者の悪い行いが記されている。これらの書は法典、すなわち聖書と照らし合わせられ、それに従って彼らは裁かれた。聖徒たちはイエスと心をつにして、悪しき死者たちに判決を下す。「見よ」と天使は言った。「聖徒たちはイエスと一致して裁きの座に就き、肉体にあって行われた行いに従って、それぞれの悪者に割り当て、裁きの執行のときに彼らが受けねばならないものが、その名のところに付される。」これは、私が見たところでは、千年のあいだ、地に下って来る前の聖なる都において、イエスと共に聖徒たちが行う務めであった。やがて千年の終わりに、イエスは天使たちと、彼と共にいるすべての聖徒たちと共に聖なる都を出て、彼が彼らと共に地上へ降りて来られる間に、悪しき死者たちがよみがえらされる。そして「彼を刺し通した」まさにその人々もよみがえられ、遠くから、栄光のうちにおられる彼と、その共にいる天使と聖徒たちを見て、彼のゆえに嘆き悲しむであろう。彼らは彼の手と足の釘あと、そしてそのわき腹に槍を突き立てた箇所を見るであろう。釘あとと槍の傷は、そのとき彼の栄光となる。イエスがオリブ山に立たれるのは千年の終わりであり、その山は真っ二つに裂け、広大な平地となる。その時に逃げるのは、ちょうど今しがたよみがえらされた悪者たちである。すると聖なる都が下ってきて、その平地に据えられる。

そのときサタンは、よみがえらされた悪しき者たちに自らの霊を吹き込んだ。彼は、都の中の軍勢は小さく、自分の軍勢は大きい、ゆえに聖徒たちに打ち勝って都を奪えるのだとおだてた。サタンが軍勢を結集しているあいだ、聖徒たちは都にいて、神の楽園の美しさと栄光を眺めていた。イエスが彼らの先頭に立って導いておられた。すると突然、美しい救い主は私たちのもとから姿を消された。しかしまもなく、私たちはその美しい御声を聞いた。「わが父に祝福された者たちよ、世の初めからあなたがたのために備えられている御国を受け継ぎなさい」。私たちはイエスのまわりに集まった。そしてちょうど彼が都の門を閉ざされたとき、悪しき者たちに呪いが宣告された。門は閉じられた。すると聖徒たちは翼を用いて、都の城壁の頂へと舞い上がった。イエスもまた彼らとともにおられ、その冠はまばゆく栄光に輝いていた。それは七重に重なった冠であった。聖徒たちの冠はこの上なく純粋な金でできており、星で飾られていた。彼らの顔は栄光に輝いていた。というのも、彼らはイエスのかたちをありありと映していたからである。そして彼らが立ち上がり、皆そろって都の頂へと進んでいくのを見て、私はその光景に心を奪われた。

そのとき悪人たちは自分たちが失ったものを見た。そして神の火が彼らに吹きかけられ、彼らは焼き尽くされた。これは裁きの執行であった。そのとき悪人たちは、千年の間にイエスと一致した聖徒たちが彼らに対して定めたとおりの報いを受けた。悪人を焼き尽くした同じ神の火が、全地を清めた。裂けて荒れた山々は烈しい熱で溶け、大気もまた、すべての枯れ草も焼き尽くされた。すると私たちの嗣業が栄光に満ち美しく目の前に開かれ、私たちは新しくされた全地を受け継いだ。私たちは皆、大声で「栄光あれ、ハレルヤ」と叫んだ。

また私は、牧者たちは、彼らが信頼するに足ると認める者、すべてのメッセージに携わってきて現在の真理すべてに堅く立っている者に、彼らが聖書が支持していると考え重要な新しい点を唱える前に相談すべきであることを見た。そうすれば、牧者たちは完全に一致し、その一致は教会に感じられる。そのような歩みは不幸な分裂を防ぎ、そうなれば、尊い群れが分裂し、羊が牧者のないまま散らされる危険もなくなる、と私は見た。

9月23日、主は、ご自分の民の残りの者を回復するために二度目に御手を伸ばされたこと、そしてこの集めの時には努力を倍加しなければならないことを私に示された。散らしの時にはイスラエルは打たれ、引き裂かれた。しかし今や集めの時には、神はご自分の民を癒し、その傷を包んでくださる。散らしの時には、真理を広めようとして払われた努力はほとんど効果がなく、わずかしか、あるいは何も成し遂げなかった。しかし、神がご自分の民を集めるために御手を伸ばしておられる集めの時には、真理を広めるための努力は意図された効果をもたらすだろう。皆が一致してこの働きに熱心であるべきだ。私は、今の集めの時に私たちを律する模範として散らしの時を引き合いに出すのは、誰であれ恥ずべきことだと見た。というのも、もし神が今あの時以上のことを私たちのためになさらないのなら、イスラエルは決して集められることはないからである。真理は、宣べ伝えられるのと同様に、紙上に発表されることも必要である。

主は私に、1843年の図表は主の御手によって導かれ、そのいかなる部分も変更してはならず、数字も主が望まれたとおりでであることを示された。さらに、主の御手がその上であって、いくつかの数字にある誤りを覆い隠しておられたため、御手が取り去られるまでは、誰にもそれは見えなかった。

それから私は「Daily」に関して、「sacrifice」という語は人間の知恵によって補われたもので、本文に属するものではないこと、また主がその正しい見解を「審判の時の叫び」を告げた者たちにお与えになったことを見た。1844年以前に一致が保たれていたときには、ほとんどすべての者が「Daily」に関する正しい見解で一致していた。しかし1844年以降、混乱の中で他の見解が受け入れられ、暗闇と混乱が後に続いた。

主は私に、1844年以來、時は試練ではなかったこと、そして時が二度と試練となることはないことを示された。

それから私は、主が来られる前に聖徒たちはなお旧エルサレムへ行かなければならない、などという大きな誤りに陥っている者たちがいることを示された。このような見解は、第三の天使のメッセージのもとで進められている神の現在の働きから、人々の心と関心を奪うものだ。というのも、もし私たちがエルサレムに行くことになってい

るのなら、心は当然そこに向き、資金も他の用途から引き上げられて、聖徒たちをエルサレムへ行かせるために注がれてしまうからである。彼らがこの大きな誤りに陥ることを許された理由は、過去数年来犯してきた誤りを告白して捨て去っていないからだ、私は見た。Review and Herald、1850年11月1日。

その一節は次の言葉で始まっている。「主が最近、幻の中で私に示されたことの簡単な概略をあなたにお伝えしたい。」いくつかの主題が提示されており、彼女は“the daily”を扱う段落を次の段落と結合しなかった。

それは後になって、当該箇所を『Experience and Views』に、さらにその後『Early Writings』に収めた編集者たちによって行われた。『Experience and Views』では、編集者は最初の八つの段落を省き、彼女が“the daily”について示されたことと時期設定について扱う段落を一つにまとめた。

『Experience and Views』は1851年に出版され、その後『Early Writings』は1882年に出版された。

『Early Writings』は、基本的には『Experience and Views』に掲載されていたのと同じ四つの段落で構成されていたが、ただし一つ重要な例外があった。『Experience and Views』では、時期設定に言及した一文からなる段落が、「the daily」を扱った直前の段落と結合されていた。さらに、もともとその時期設定の段落に続いていた段落も取り込まれていた。ところが『Early Writings』では、『Experience and Views』の別の箇所から来た一つの段落が、いまや「the daily」と時期設定の双方を扱うその段落と、もともとは古いエルサレムへの巡礼がなぜ誤りであることを示していた段落との間に挿入された。

「Experience and Views」の別のページから取り除かれ、その後「Early Writings」の一節に挿入されたその段落は、1844年以來の「the daily」をめぐる混乱をさらに深めただけだった。その段落は、シスター・ホワイトの幻に関する元の叙述には含まれていなかった。

主は私に、第三天使のメッセージは出て行って、散らされている主の子らに宣べ伝えられなければならない、またそれを時期の設定に結びつけてはならないと示された。というのは、時期は二度と試しとはならないからである。私は、時期を説くことから生じる偽りの興奮に駆られている者がいるのを見た。第三天使のメッセージは、時期というものよりも力強いのだ。私は、このメッセージは自らの土台の上に立つことができ、それを強めるために時期を必要とせず、大いなる力をもって進み、その働きをなし、義において速やかに終わらされるのを見た。Experience and Views, 48.

『Experience and Views』の48ページの段落は、二つの異なる段落を組み合わせて作られた『Early Writings』の段落の後に挿入され、元の叙述にはなかった時期設定を強調するものとなった。

1931年、エルサレムの民を治めていた古参の指導者たちが、Daniellsが1910年にSister Whiteにインタビューしたと主張する作り話をでっち上げた。Daniellsの証言とされる中では、彼は1843年の図表に言及し、Sister Whiteにインタビューしている最中、その図表には存在しない聖所を指さしたのだと述べている。彼は『Early Writings』を携えてい

たことになっており、彼女が何を意味しているのかを尋ね、その応答に基づくと、『Early Writings』において「the daily」に関する先駆者の見解を支持しているように見える箇所は、実は時期設定に対する警告だと結論づけるほかない、とされた。こうして、そのでっち上げられたインタビューから21年後、しかもインタビューを受けたとされる人物たちの死から16年後に、Daniellsはその証言を第三世代の歴史に組み込んだ。

F・C・ギルバートはヘブライ語学者であり、彼が「the daily」を異教とみなす正しい見解を支持したのは、先駆者たちやエレン・ホワイトがそう言ったからというだけではなかった。彼は、預言者ダニエルが用いたヘブライ語本文の理解に基づいて、その見解を擁護した。彼は当時、アドベンチストを代表するヘブライ語学者であった。ダニエルズとプレスコットが推し進めていた「the daily」をめぐる論争が拡大する中、ギルバートは先駆者たちの立場の擁護に立った著名な学者の一人だった。彼は1910年6月8日にエレン・ホワイトと面談し、のちに自分とホワイト姉妹が話し合った内容を記録した。ダニエルズの証言はF・C・ギルバートのものと完全に相反している。

Manuscript Releases 第20巻の17～22ページにおいて、ホワイト姉妹は「daily」に関するダニエルズとプレスコットの立場に言及している。エレン・ホワイトとのインタビューについてのF・C・ギルバートの報告に見られる表現は、Manuscript Releases の該当箇所ホワイト姉妹自身が述べた内容とほとんど同一である。したがって、Manuscript Releases が刊行・公開される以前の長年にわたり、ダニエルズがホワイト姉妹と行ったとされるインタビューの内容についての彼の主張を支持するにせよ反証するにせよ、靈感に基づく具体的な証言は存在しなかった。さらに重要なのは、彼の「daily」に関する誤った見解を是認する靈感の裏づけがなかったことである。さらにいっそう重要なのは、Manuscript Releases が入手可能になった今でも、彼の「daily」に関する誤った見解を是認する靈感の裏づけは依然として存在しないということである！

それにもかかわらず今日、ラオデキア的アドベンチズムでは、ホワイト夫人は「daily」について立場を持っていない——ただし、それは「試験の問題」ではなく、私たちは「この件については黙っているべきだ」——と教えられている。今日、何かが逆転しており、逆転しているのは、「daily」の真の立場が今や神の民の間で少数意見になっているということだ。1910年には、少数派の見解はダニエルズとプレスコットが推進していたコンラディの見解であり、多数派の見解はパイオニアの立場であった。

以下は、ホワイト姉妹との面談に関するF・C・ギルバートの陳述であり、Manuscript Releasesと比較されるべきもので、全文は本『ダニエル書』シリーズの第81回に掲載されている。

Daniells と Prescott は . . . この大義における年長の兄弟たちに、何かを言う機会をまったく与えようとしなかった . . . Daniells は私に会いにここへ来たが、私は会おうとしなかった . . . 私は彼に対しては、何事についても一切話すつもりはなかった。彼らが作り上げようとしている 'daily' については、何の中身もない . . . 私が Washington にいたとき、彼らの心をすっぽり包み込むような何かがあるようで、私はどうしても彼らの心に触れることができないように思えた。私たちはこの 'daily' という主題には一切関与してはならない . . . 彼らが私のメッセージに反対して動くことはわかっていたし、そうなれば人々は

私のメッセージには何の中身もないと考えるだろう。私は彼に手紙を書き、彼は General Conference の会長であるにふさわしくないことを自ら示していると伝えた。 . . . その職を保ち続けるに足る人物ではない。

もし『daily』のこのメッセージが試しのメッセージであるなら、主は私に示してくださったはずですが、彼らはこのことにおいて、初めから終わりを見通していません。 . . . 私は、この働きに従事している者たちの誰とも会うことを断固として拒みます。

「神から私に与えられた光は、Daniells兄弟は会長職にもう十分長く務めてきたということです。 . . .そして、これらのことについて彼とこれ以上話をしないようにと言われました。私はこの件でDaniellsに会わず、彼と一言も交わしませんでした。彼らは彼と面会するようにと私に懇願しましたが、私は応じませんでした。 . . .彼らが教えているこのことに私たちの人々が関わらないよう警告するようにと私は言われました。 . . .主によってそれを聞くことを禁じられました。私はそれに対して微塵の信頼も置いていないと表明してきました。 . . .彼らが行っているこの一連のことは悪魔のたくらみです。」1910年6月8日にEllen Whiteが彼に応じたインタビューについてのF. C. Gilbertの報告。

この話題は次の記事で続けます。

表面の下を見抜き、すべての人の心を読み取るお方は、大いなる光を受けてきた者たちについて、こう言われる。「彼らは自らの道徳的・霊的状态のゆえに苦しみ、驚くことがない」。「まことに、彼らは自分の道を選び、その魂は自らの忌むべきことに喜びを見いだしている。わたしもまた彼らの惑わしを選び、彼らの恐れを彼らの上にもたらず。わたしが呼んだとき、答える者は誰もなく、わたしが語ったとき、彼らは聞かなかつたからである。むしろ、彼らはわたしの目の前で悪を行い、わたしの喜ばないものを選んだ」。「神は彼らに強い惑わしを送り、彼らが偽りを信じるようにされる」。それは、彼らが救われるための真理への愛を受け入れなかつたからであり、「むしろ、不義を喜んだからである」。イザヤ 66:3, 4; テサロニケ人への第二の手紙 2:11, 10, 12.

天の教師は問いかけた。「実際には世俗の方策に従って多くのことを行い、エホバに対して罪を犯しているのに、自分は正しい土台の上に建てており、神が自分の業を受け入れておられるのだと思い込むこと——これ以上に心を惑わす強い迷妄がほかにあるだろうか。ああ、かつて真理を知った者たちが、敬虔のかたちをその霊と力と取り違えるとき、人の心をとらえるのは、大いなる欺きであり、魅惑的な迷妄である。彼らは自分たちは富み、財にあふれ、何一つ必要としていないと思い込んでいるが、実際にはあらゆるものを必要としているのだ。」

衣を汚れのないままに保っている忠実なしもべたちに対して、神は変わっておられない。しかし、多くの者は「平和だ、安全だ」と叫んでいるが、その一方で、突如として滅びが彼らに臨もうとしている。徹底した悔い改めがなく、人々が罪を告白して心をへりくだらせ、イエスにあるとおりの真理を受け入れないかぎり、彼らは決して天に入ることはない。私たちの間に清めが行われるとき、私たちはもはや、富んでおり、財が増し加わって、何一つ必要がないと誇って、安逸に安住することはなくなる。

だれが真実にこう言えるだろうか。「私たちの金は火で試され、私たちの衣は世の汚れに染まっていない」私は、私たちの教師が、いわゆる義の衣を指し示しておられるのを見た。それらをはぎ取り、その下の汚れをあらわにされた。それから彼は私に言われた。「彼らがどのように見せかけで自分たちの汚れと品性の腐敗を覆い隠しているか、あなたには見えないのか。『忠実な都がどうして遊女になってしまったのか！』わたしの父の家は商売の家とされ、神の臨在と栄光が去った場所となってしまった。このために弱さがあり、力が欠けているのだ。」

「いまや自らの背教というパン種で膨らまされつつある教会が、悔い改めて立ち帰らないなら、教会は自分の行いの実を、自らを嫌悪するに至るまで食べることになる。悪を退けて善を選び、全き謙遜をもって神を求め、キリストにあって与えられている高い召しに達し、永遠の真理の土台に立ち、信仰によって自分のために備えられている到達点をつかみ取るとき、彼女はいやされる。彼女は神から与えられた簡素さと純潔のうちに現れ、世のしがらみから離れ、真理がまことに彼女を自由にしたことを示す。そのとき彼女の会員たちは、まことに神に選ばれた者、神の代表者となる。」証言第8巻、249、250。